

令和3年度事業報告

令和 3 年度全体総括

令和 3 年度は、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症と共に事業を行っていく工夫の必要な 1 年でした。ZOOM などの非接触のツールを用いての会議、相談、学びなどがいたるところで展開されました。成果としては、感染リスクを抑えた集合研修なども少しずつ行えるようになり、今年度は啓発イベントとして「シブリングワークショップ」の開催や親の会「クローバーの会」の学習会「ゆうの庵」など実際に顔を合わせたの活動も実施することができました。きょうだい児への支援は、近年ヤングケアラー問題の関心の高まりもあり注目されています。「ゆうの庵」は親としてセルフヘルプや学びなど、法人や地域にとっても重要な活動だと思います。コロナ禍であっても、こうした地域のニーズに合った活動ができたことは大変良かったと思います。ありのままに自分らしく暮らしていくには、当事者だけでなくケアをしていく家族の視点にたってサポートを考えていくことも大切になってきます。地域の方と共に学ぶことができたことは、私たちにとっても大きな学びとなりました。

金屋元町と新豊町、金屋橋の 3 つの拠点を集約する新規施設設立は、令和 4 年夏の開設を目指して順調に進んでいます。各事業所の想いを盛り込んだ設計図を建築士と共に作成し、建設をしていく過程は初めてのことです。わからないことをひとつずつ確認しながら進めてきました。建設が始まると、より具体的な利用イメージができてきて期待も膨らみます。新施設のコンセプトは「顔の見える施設」です。スタッフ・利用者・家族・地域の方が笑顔で集えるような施設になればと思います。

NPO 法人ゆうは、スペシャルニーズのある方々とその家族が地域でありのままに自分らしく暮らしていくための取り組みを続けています。ゆうでは、障がい理解や科学的に実証されている手法を用いて、一人ひとりへの配慮や支援を行っています。

一人ひとりのスタッフが、理念や行動指針を基にして、自ら考え実践する日々の支援が、家族や本人だけでなく、法人全体の成長にもつながっています。

コロナ禍の中でも令和 3 年度の各事業は、ありのままに自分らしくの理念のもと会員・スタッフの想いを乗せてみんなに寄り添いしっかりと行うことができました。

理事長 豊田和浩
令和 4 年 3 月 31 日

＜ゆうが活動の柱としている考え＞

理念「ありのままに、自分らしく」

スペシャルニーズのある方の想いに沿ったサポートをします。

スペシャルニーズのある方にあたたかいまちづくりを目指します。

スペシャルニーズのある方の支援を、ご家族とともに考えていきます。

スペシャルニーズに関する情報発信とネットワーク作りをします。

スタッフ行動指針

NPO法人ゆうスタッフは以下の行動指針に沿って支援・活動を行っています。

1. 利用者・家族・スタッフ・地域の方々など、すべての人を尊敬し尊重する姿勢を持ちます。
2. 利用者のありのままを受け入れ、本人主体の支援を行います。
3. 利用者の将来を見据えた支援を行います。
4. 利用者の心の声を聞き、強みや得意を活かした安心感のあるかわり方を、本人・家族とともに考えます。
5. 自分の仕事に誇りと自信を持ち、向上心を忘れず、変化を恐れず行動します。
6. 思いやりや気配りをもって、チームで支援を行います。
7. 自分のふるまいが、あたたかい地域づくりにつながっていることを常に意識します。

令和3年度の事業

令和3年度事業は以下の体制で行った。

人づくりまちづくり部門

福祉啓発部

- 福祉相談・個別療育相談・家庭療育指導
- 講師・アドバイザー派遣
- 講演会など
- 各種学習会・茶話会
まなびん・ゆうの庵
- 市民活動団体・研究会の事務局委託
自閉症啓発キャラバン Swing、穂の国 PECS サークル、TEACCH とよかわ
- 行政からの委託事業（ペアレントトレーニング、新城市保育士研修など）

余暇文化活動援助事業

- きょうだいの会
- クローバーの会

直接支援部門

- ゆうヘルパーステーション（短期預かり、福祉移送、行動援護、移動支援）
- ゆうサポートセンターどーや（生活介護）
- ゆうサポートセンターとことこ（児童発達支援）
- 豊川市児童発達支援施設ひまわり園（児童発達支援、保育所等訪問支援）*指定管理
- ゆうサポートセンター（児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援）
- 相談支援 Kids ふぁ～すと（児童相談支援）
- ゆうショートステイとれ☆キャン（短期入所、日中一時支援）

本部事務局

- 法人事務管理

人づくりまちづくり部門

《福祉啓発部》

今年度は新型コロナの感染防止対策を行いながらの活動となった。

福祉相談・個別療育相談・家庭療育指導

ZOOMでのオンライン相談と感染防止対策をした上での短時間の対面相談を行った。

相談担当者 5名

対面 48回 オンライン 10回

講師派遣・アドバイザー事業・講演会等

コロナ禍2年目となり、各研修もZOOMや対面、ハイブリッドなどの選択や開催方法なども事前に協議が行われwithコロナの研修体制となった。

- ・新城市療育実践研修
- ・新城市ペアレントメンター研修
- ・豊川市「叱らずにすむ子育て」
- ・豊川市「ティーチャーズトレーニング」
- ・豊川市子育てネット「子育てサポーター養成講座」
- ・行動援護従業者研修
- ・サービス管理者・児童発達支援管理責任者研修 基礎・実践・更新研修
- ・強度行動障害支援者養成研修（国研修）
- ・愛知県障害者虐待防止研修
- ・シブリングワークショップ（NPO法人しぶたね共催）豊川市社会福祉協議会補助事業

学習会・茶話会・交流会

まなびんは年7回ZOOMにて開催した。地域の施設職員、保護者、ゆうの新人スタッフが参加している。ゆう親の会「クローバーの会」主催で「ゆうの庵」を開催した。「不登校・登校しぶり」「重度・最重度の子育て」「小学校ってどんなところ？」の3回の茶話会を行い、延べ40名が参加している。

市民活動団体・研究会の事務局委託

- 自閉症啓発キャラバン Swing
ZOOMでの定例会（毎月）をZOOMにて行った。
また、啓発公演については、感染状況に応じてZOOMで2回、対面で1回行った。
- 穂の国 PECS サークル
近隣の感染状況に合わせて、ZOOMと対面を使い分けて、定例会を開催した。
5月（ZOOM）、7月（対面）、9月（ZOOM+対面）、1月（ZOOM）

➤ TEACCH とよかわ

ZOOM にて毎月事例検討会と実践報告会を行った。11 月は自立課題のセミナー動画を視聴し、12 月のみ対面にて自立課題の作成会を行った。

《 イベント部 》

きょうだいの会

障がいや発達につまずきのあるきょうだいがいる子どもたちが、普段できないいろいろな体験をし、きょうだいのことを普通に話せる友達作りを目的としている。今年度は感染防止対策を行い、年 3 回開催した。

- ・浜北アスレチックへ行こう！
- ・リモートおしゃべり会
- ・スケートをやってみよう

直接支援部門

公的支援の直接支援部門の報告は各事業所より以下の通り。

事業所名	ゆうヘルパーステーション	管理者	豊田 和浩
サービス提供責任者	門之園 由美	現場責任者	門之園 由美
<p>令和3年度の実施総括</p> <p>前年度に引き続きコロナウイルスによる緊急事態宣言の発令や身近での感染者が増えたこともあり、お出かけのキャンセルが相次ぐ月もあった。それでも感染者数が落ち着いた時期には感染対策をしながら、日帰り旅行や県外へのお出かけをしたりと、利用者さんの余暇の充実を図れるように取り組んできた。また、新規受け入れや病院内での行動援護の実施も取り組むことができた。</p> <p>日常の業務についても、空いた時間を使って各スタッフが書類の整理や自立課題の作成・改良等に取り組むことが出来た。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナウイルスの状況を見て落ち着いた時期には、以前のように日帰り旅行や遠出のお出かけをすることができた。 ・入院期間が長くなってしまっている方が地域に戻ってこられるよう、病院を含めた関係機関の方と連携しながら、病院内での行動援護の実施をすることができた。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・緊急事態宣言の発令や身近での感染者増加に伴い、キャンセルで空きができたところに追加の支援を入れることも難しく、大幅な赤字に繋がってしまった。 ・新規利用希望のご連絡を頂いたが、人員体制が整わず待機となっている。 ・業務分担はしているが、スタッフによって余裕があったり、追いついていなかったりとばらつきがあるため見直しが必要。 		

事業所名	ゆうサポートセンタードーヤ	管理者	岡部 祥子
サービス管理責任者	岡部 祥子	現場責任者	岡部 祥子
<p>令和3年度の実施総括</p> <p>利用者2名が増え、始めの2~3か月はエリア設定・環境設定・スタッフ配置を見直し続け、落ち着いて過ごせる環境作りを行った。新規の2名とも本人の思っていることと現実にズレがあったり、コミュニケーションが上手にとれないと大きく崩れ、大きな声がでてしまったり、物の破壊や他害といった行為が多々見られた。不穏状態になってしまった時に刺激の少ないところで落ち着くためのカームダウンエリアを設定し、そこで落ち着いて頂くことも行った。現在でも不穏にさせてしまうことは時々あるが、特性に配慮しながら支援を続けてきたことで大きく崩れる回数は格段に減ってきている。</p> <p>スタッフに関しては入れ替わりが多くある年で、退職されたスタッフもおり、入ってくるスタッフはほぼ新人ばかりという状況であった。そのため、より昨年度課題となっていた支援後のMTの時間をとろうと意識づけ、MTを行った。スタッフが増えたことで送迎スタッフも日によって変えることができ、MTに参加できるスタッフも増えたことで皆さんから意見を集めることが増えた。利用者の課題や気になる点をMTにてスタッフ間で共有し、それもアプリで記録を残しておくことでMTに参加できなかったスタッフとも共有することができた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、祝日営業を数日行い、ほぼ全員の方が祝日も変わりなく通われた。そのため、年間通して休みが続くことでの不安定を招くことなく、利用者が安定した1年を過ごすことができた。 ・自主製品作りではポチ袋を中心に販売を行った。特にお年玉シーズンには、チラシを作成し注文受付を行ったことで沢山の注文を受け、利用者の作業提供・工賃を増やすことが出来た。又、自主製品を販売することで、地域の方々への利用者のイメージアップにも繋げることが出来た。 ・コロナ禍の状況が続いたため今年度も活動に制限が生じた。が、その中でもスタッフが知恵を絞り、実施したことで、利用者の楽しみも継続して提供することが出来、スタッフも利用者への理解を深めることが出来た。今年度は施設内でビュッフェパーティー、テイクアウトでランチや、外出ではリトルワールドに全員で行くことが出来、初めて集合写真も撮ることが出来た。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・パニック状態になってしまうと他の利用者さんに向かっていく方がいるので、そういった状態になったときに力の強い利用者さんなので止められるスタッフが限られることも多く、又、怪我をしてしまったスタッフもおり、スタッフの精神的重さの軽減。 ・「音」が課題となっている利用者が多くいるが、建物の構造もあり、なかなか改善出来ず、利用者一人一人が安心できる室内環境にはできていない。そのため、利用者が事務所で過ごすことも多くあり、スタッフの休憩がしっかりと取れていないことも課題である。 		

事業所名	ゆうサポートセンター とことこ	管理者	十都 敦子
児童発達支援管理責任者	十都 敦子	現場責任者	十都 敦子
<p>令和3年度の実施総括</p> <p>令和3年度は、利用児16名（内、年長児8名、年中児7名、年少児1名） 今年度も2クラスに分け、少集団（5～6人）での療育を行った。途中、活動によってクラスを行き来する等、発達に応じた集団参加ができる取り組みを行った。2月には新型コロナの集団感染のため1週間休所、翌週は人数制限を行っての開所となったが、自宅待機の利用児の保護者に対しては、電話で様子の共有や保護者、子供の困り感に対する助言を行い、関係の継続、ご家庭での生活の支援を行った。 保護者会はコロナ禍ではあったが、ほぼ毎月開催することができた。例年行っていた行事も、ねらいを確認した上で、人数を分け、回数を多く開催することで対応を行った。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ★自立の場面、お手伝いや係の仕事をして自己有用感が感じられる場面、模倣や語彙を増やす試み等を増やした。語彙が増えてきたクラスでは、きらきら言葉、とげとげ言葉の取り組みを行い、お友達と認め合う姿が増えた。 ★担当が舵を取り、スタッフ同士連携を取りながら取り組むチーム支援が多くあった。 ★個別課題の時間を増やし、個々の学びを広げ深めることができた。その結果、自立課題の充実にも繋がった。 ★運動会では、自立課題からヒントを得た種目、やり取りのある種目等、今子供たちができることを存分に取り入れた種目が多くあり、充実したものとなった。 ★日案にアセスメントと記入担当を設定したことで、アセスメントを取る習慣ができ、アセスメントをもとに組み立てる活動が増えた。 ★3つに絞る支援計画により、作成、モニタリングの作成がスムーズに行えた。 ★保護者自身に実践していただくことを意識した保護者支援で能動的に取り組む保護者が多くおられた。 ★保護者会では保護者同士の交流の機会を増やすことで、学び合い、支え合いの姿が多くみられた一年となった。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・新事業所への引っ越し。新事業所の構造化。利用児のスムーズな移行支援。 ・取り組みの年間計画を元に実践に移し、アセスメントを元に支援の見直しを行う。 ・子供の芽生えをタイミングよく掴むために必要な情報を継続可能な形で記録する方法の定着、情報共有のためのシステムを継続して回していく。 ・必要な書類、必ずしも必要ではない書類を分類し、作成する書類を減らす。内容もねらいに応じて絞り、作成時間を短縮する。 ・家庭連携加算による保育園、幼稚園への定期的な連絡、場合により訪問を行う。 ・加算について整理し、対象となるサービスは加算を申請していく 		

事業所名	豊川市児童発達支援施設 ひまわり園	管理者（園長）	丸山 尚美
児童発達支援管理責任者	丸山 尚美 森川 せつ子	現場責任者	丸山 尚美
<p>令和3年度の実施総括</p> <p>令和3年度は大きく分けて4つのコース（2歳児、2歳児待機、園・療育併用午前、園併用午後）で療育を行った。利用者のニーズの変化により年少以上の療育のみのコースがなくなり、園併用のコースが増えた。</p> <p>令和3年4月から児童発達相談センターの開設に伴い、見学調整や同行、福祉サービスを受けるまでに必要な一連の流れをセンターが担ってくれることで役割の明確化につながった。</p> <p>コロナ禍の療育で制限はあるものの、できる範囲で楽しく様々な経験ができるように活動の提供に努め、学習会では発達や子どもに関わるコツを学ぶ機会を作り、それぞれの時期に必要な進路や療育機関などの情報提供を行った。</p> <p>保育所等訪問支援では、必要に応じて支援会議を行い、園と保護者、ひまわり園の三者で、子どもの課題や支援の方向性を確認し、共有することができた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・マスク生活が当たり前のコロナ禍で、発達の特性から人の表情の変化に気づきにくいお子さんもみえるため、これまで以上にジェスチャーや本人が分かるものを見せながらやることを伝えてきた。これらの対応は外国籍の日本語の理解が難しい親子にも有効だった。 ・新型コロナウイルス感染が心配で登園を控える利用者もみえたが、新型コロナによる代替サービスを利用し、お電話でご家庭での困り感や悩みをお聞きし、相談援助をすることで保護者の不安の軽減につなげた。 ・園併用コースが増え、まずは家庭連携加算で併用先の園での様子を確認し、継続的な支援が必要なお子さんには、保護者の希望も伺ったうえで保育所等訪問支援につなげることができた。保育所等訪問支援事業では、訪問時に課題や対応について共有し、必要に応じて支援会議やティーチャーズトレーニング講義を行った。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てをめぐる社会状況の変化や社会全体がストレスを抱え込みやすくなっているため精神疾患を抱える保護者や他人と良好なコミュニケーションをとることが難しい保護者も増えている。関係機関とも連携をとりながら、通い続けていただけるよう関係づくりをしていきたい。 ・業務内容が増え、残業がある。様々な視点での業務改善が必要。 		

事業所名	ゆうサポートセンター いまーじゅ	管理者	豊田 和浩
児童発達支援管理責任者	大橋 美保（鈴木 弥聡）	現場責任者	鈴木 弥聡
令和3年度の実施総括			
<p>1～3歳児の親子の個別療育を行った。個々の発達に合った取り組みを行い、子どもの「できた」「よかった」「わかった」を増やす支援を行った。関わり方や子どもの行動の理由を直接子どもの様子を解説しながら、シートに記入しながら、文章にまとめて確認しながら、丁寧に伝える保護者支援を行った。</p> <p>豊川市児童発達相談センターができたことにより、夏頃からセンターからの紹介で利用につながる親子が増加。1～2歳児の利用が増えた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ● 子どもの『できた』『よかった』『分かった』経験を作るために、常に子どもの心の声を保護者へ解説したり、保護者の気持ちに寄り添うことを意識し、相談内容や家庭用プログラムに保護者が記載した言葉の1つ1つを想像し、丁寧な聞き取りや相談対応を行った。 ● 引き続きスタッフ全員で支援を考える方針の中で担当制をとり、担当スタッフが保護者の面談、相談対応等責任をもって行った。 ● 保護者に子どもとの関わり方をより練習していただくために、保護者の様子に合わせて、家での関わり方に活かせる場面を検討・設定し、取り組んでもらう機会を作った。 ● 子どもたちがさまざまな経験を積めるように、散歩、クリスマス会、避難訓練、節分等、子どもたちそれぞれ個別の「できること」「分かること」に合わせて計画・実施し、楽しむ機会を作った。いつもと違う活動を行うことで、室内の活動では気づけなかった子どもの特性や関わり方のコツ、保護者の困り感に気づき、日々の療育へ活かした。 ● まずは1人の利用から、いまーじゅ利用児の保育所等訪問支援を行った。保育園での生活をスタッフが実際に見ることで、いまーじゅの支援目標をより子どもに合ったものに検討しやすくなる等いまーじゅの療育へ活かすことができた。一方で、訪問はいまーじゅの療育時間と同じ午前中の為、いまーじゅ療育へのフォロー人員が必要、普段の仕事にプラスして訪問の事務仕事が追加されるなどスタッフの負担もあった。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・児童発達相談センターとの連携、役割分担。 ・効率よく仕事をすすめる仕組み作り。センターができていまーじゅへつながる流れが変わったことにより、今まで年度始めは少人数だったが、定員いっぱい＋利用待機もいる状態で年度が始まっている。加えて、必要があれば保育所等訪問支援も開始する予定。スタッフの人数は変わらないことから、業務量増加が予想される。 		

事業所名	ゆうサポートセンター ほっとそと	管理者	豊田 和浩
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	大橋 美保
<p>令和3年度の実施総括</p> <p>令和3年度の利用児は35名（内、終了・卒業児：6名）。中学校入学後の生活の変化に伴う終了など、年度途中での終了児童が例年に比べて多くおり、都度、新規児童の受け入れを行った。</p> <p>今年度も、昨年度と引き続き、コロナ対策のため感染症対策を行い、タイミングを見極めて外出活動を実施したり、人との接触が少ない形でできる限りの活動を行うなど、工夫をして支援を実施した。今年度は特に、小中学校でコロナ陽性者が多く出たために、休校や学級閉鎖などが多数出て、ほっとそとの欠席者も多く見られ、必要に応じて、家庭と情報共有を行ったり、相談の時間を設けた。ほっとそとと利用児や利用児家族、スタッフの中での陽性者も見られたが、特に感染が広がることはなく通常通りの営業を継続した。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたち同士で遊べる機会を増やすことを目的に、集団遊びを活動として設定した（モンスターメーカー、ウノ、ポケモンカード、ババ抜き、人生ゲーム等）。全体にそれぞれのルールの理解を促し、子どもたちが楽しんでできるように必要な構造を設定することで、「楽しかった」「できた」経験を積んでもらうことができた。特に、自由遊びではそのゲームを使って他児と遊べる姿や、他児に自分からやりとりする姿につながった。 ・保護者の相談ごとについては、送迎時だけでなく、個別に相談の時間を設けたり、アナウンスするなど、その必要性に応じた対応を行い、より具体的な助言を行うことができた。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・集団活動にはまだ参加が難しく、大人との個別の関わりや経験をすることにニーズがある児童にとっては、ほっとそとの枠組みの中ではニーズを満たしきれず、受け入れが難しい。一方で、地域の中で受け入れ先がないために、ほっとそとでの受け入れを検討せざるを得ない状況が続いている。 ・業務が多く、スタッフ少人数で対応しているために、見学対応やスタッフの有休時にはスタッフの応援をあらかじめ依頼する必要があるため、スタッフの体調不良など急遽の欠勤に対応することが難しいことが浮き彫りになった。 		

事業所名	ゆうサポートセンター じょいん	管理者	豊田 和浩
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	太田 章乃
<p>令和3年度の実施総括</p> <p>令和3年度は小学校の長期休校はなかったものの、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた一年となり、訪問件数は昨年度より下回りました。しかし、小学校対象に行った年度末のアンケートでは、じょいんの訪問支援が「役に立った」が9割を超え、頂いたコメントからもじょいんの支援が役に立ったといったお声を頂き、限られた訪問件数一定ではあったが、一定の質を保って支援を行うことができたと考えている。</p>			
今年度の成果	<p>今年度の重点目標から、</p> <p>「小学校との連携を丁寧に進めていくと共に学校教育課との更なる情報共有の強化に努める」: アンケート結果からも小学校との連携を丁寧に進めることはできたと考えられ、また学校教育課からも個別のケースについてじょいん宛てにお電話頂いたこともあり、目標は達成できたのではと考えている。</p> <p>「訪問支援のマニュアル作りを進めていく」: 昨年度も目標に掲げて達成できていなかったが、今年度も必要書類の流れなどは整備を進められたところもあるもののマニュアル作りはできていないため、反省点に挙げられる。</p> <p>「必要なお子さんには他事業所のスタッフに同行の機会を図る」: コロナ感染拡大の影響が色濃かった一年で、感染予防の観点から帯同人数を増やすことは難しく、目標達成はできていません。</p> <p>「限られた時間の中で効率よく支援を届ける工夫を行う」: 提供できる日時が限られる中ではあったが、訪問の仕方や情報提供の仕方を工夫し、学校との連携を損ねることなく支援を届けることができたと考えられ、概ね達成できたと考えられる。</p>		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・今後何がいつどうなっても大丈夫なように一つずつ訪問支援のマニュアル作りを進めていく。 ・学校依頼で始まる事業でないため、支援が必要なお子さんでも先生のニーズが薄い、もしくは無い場合に、現状の共有しかできていない現状がある。 ・訪問支援員が一人で業務を行っているため、多機能事業所の他部門で何かしらのサポートが必要になるとすぐに業務が滞ってしまいがちな側面がある。 		

事業所名	相談支援 Kids ふぁ～すと	管理者	荻野 ます美
—————	—————	現場責任者	荻野 ます美
<p>令和3年度の実施総括</p> <p>コロナ禍で家庭への訪問が難しい状況の中、基幹相談支援センターからは電話やメールでの聞き取りで算定して良いとの指示があったが、電話での聞き取りの後、モニタリング報告書の内容共有を本部で行うことにより、保護者や利用者とは直接顔を合わせて話す機会を確実に作る事ができた。保護者からも好評であった。また、複数の事業所が集まる担当者会議についても書面開催で良いとのことであったが、感染予防に留意しながらできる限り開催し、ZOOMでも開催した。結果、コロナの影響を最小限にとどめながら、相談支援が行えたと考えている。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・法人内で2名のスタッフが相談支援専門員研修を受講し、そのうちの1名が兼務ではあるが、年度内に相談員としての業務を開始した。 ・ZOOMでの担当者会議が行える体制が整った。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・放課後デイの利用（継続も含めて）を断られたケースの相談が続いている。特に、重度で関わり方の難しいお子さんが断られているが、地域につなぎ先がない。 ・仕事をしている保護者が増えている中、モニタリングの時間調整が難しい状況となっている。 ・令和3年度は児童発達相談センターとは接点がありませんでしたため、連携体制はつくれていない。 ・新規受け入れが難しい状況になっている。 		

事業所名	ゆうショートステイ とれ☆きゃん	管理者	豊田 和浩
_____	_____	現場責任者	牧野 春希 三倉 拓己
<p>令和3年度の実施総括</p> <p>日中一時支援事業では過去に長期休暇のみに利用されていたお子さんが毎週1回の定期利用に繋がったり、他事業所を併用されているお子さんの新たな放課後に過ごす場所として提供することに繋がり、昨年度よりも利用者数は増加した。また昨年度から利用されているお子さんについても支援の再構造化を行い、不穏になる場面の回数も減り、穏やかに過ごせる姿が増えた。長期休暇時も安定して利用される利用者様が多かった。</p> <p>短期入所で前年度月1回だった利用者様が毎週利用できるようになったり、定期的に利用される方が増え、昨年度よりも利用者数は増加した。また、支援に関しての再構造化や夜勤スタッフとの情報共有を積極的に行い、夜勤に入る際の負担をなるべく減らし、必要であればフォローが入れる体制の構築を試みた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・短期入所、日中一時支援ともに昨年度より利用者数は増加した。それに伴い全体の収益も昨年度よりも増えた。 ・新規の利用者様の獲得や利用日数が増えた利用者様が複数名おりニーズにこたえることができた。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフの人数が少なく、特に夜勤に入るスタッフが限られている状況。突発的なスタッフの休みがあった場合にフォローを行う際の超過勤務などが発生している。新人スタッフのOJTを行う際、教えるスタッフが超過勤務にならざるを得ない状態があり、日中一時でも対応の難しい利用者様に関しては経験のあるスタッフが新人スタッフに対してOJTをしながらの勤務になるため、全般的に超過勤務になってしまうことが多くみられる。 ・全体の収益が上がったが、利用者の相性や特性などを考慮すると1日に支援できる利用者さんの人数が多く増やせない。 ・大型物品や施設の補修を行うと大幅な赤字となってしまう。 		

本部事務局 担当 浅田多世

法人運営のため、総会、理事会等の準備・運営を行った。法人の事務局として会員の管理、会報の発行、法人内の経理・労務管理などを行った。

- 現場責任者会議では、議事録を作成し出席できない者への共通理解を図った。
- 新型コロナウイルス関係の休業などの対応を行った。
- 特定処遇改善の加算取得を行った。

常勤兼務1名、非常勤専従2名

会員動向

令和3年度会員の動向は以下の通り。(令和4年3月31日現在)

近年会員数の減少がみられるため、ゆうの活動を知っていただき、会員仲間を増やしていくことが課題である。

なお、公的な福祉サービスのみの利用者は会員数に含まれていない。

正会員	36名
利用会員	105名 (個人会員 75名 家族会員 21名 団体会員 9団体)
賛助会員	46名

会議等の開催

理事会の開催	4月19日、5月13日、3月30日
総会の開催	5月29日

委員会

研修委員会	スタッフ全体研修の内容の検討、及び準備等を行った。
安全衛生委員会	アンケートの実施を行った。
権利擁護委員会	現場責任者会議で権利侵害報告書の検討。虐待防止研修の実施。
防災委員会	防災研修、マニュアルの確認、防災備蓄品の確認を行った。